

長良川河口堰の(可動堰)の実態

3. 回遊魚(海と川を行き来する魚)の激減

本流にダムが無かった長良川は、天然のサツキマス(降海型アマゴ)が上る数少ない清流でした。可動堰(河口堰)が運用になってからサツキマスの漁獲は激減しています(図1)。

かつての長良川は、アユの友釣りのメッカとして知られていました。放流魚獲量をはるかに上回る総漁獲量が記録されており、両者の差は天然アユの漁獲量と推定されます。可動堰(河口堰)運用の1995年以後は、両者のグラフは逆転し、天然アユの漁獲分が完全に失われてしまいました(図2)。また、川底を住みかとする回遊魚はほとんど姿を消すほどの激減です(図3)。代わって、ブラックバスやブルーギルが増えています。

4. 藻類の大発生

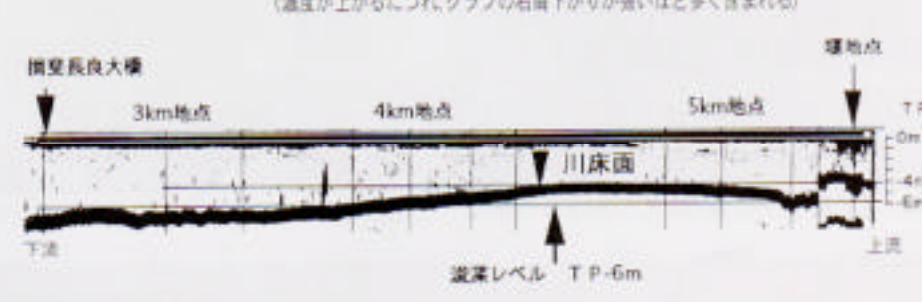
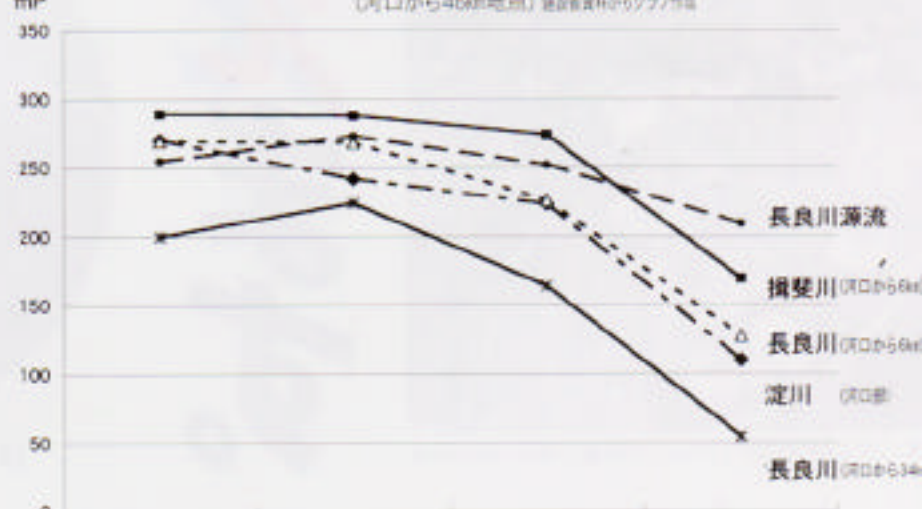
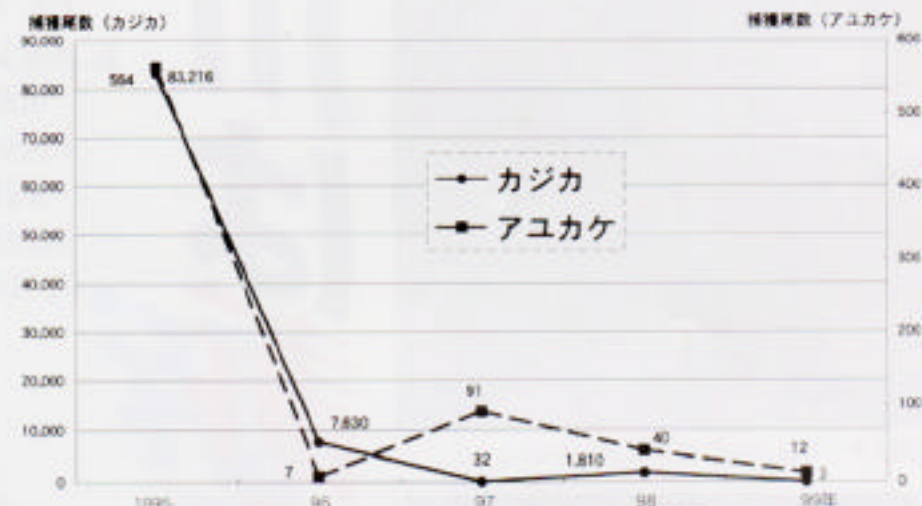
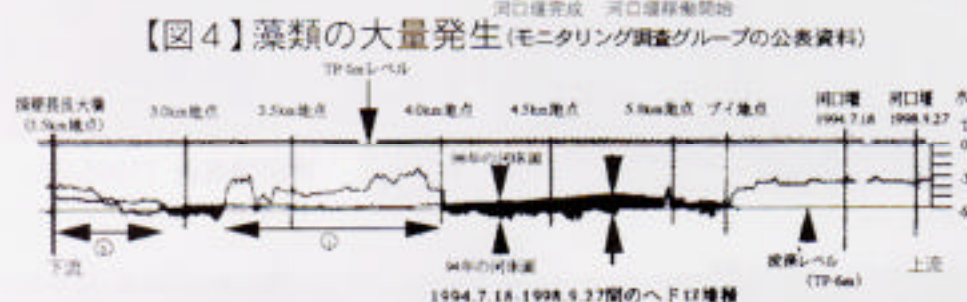
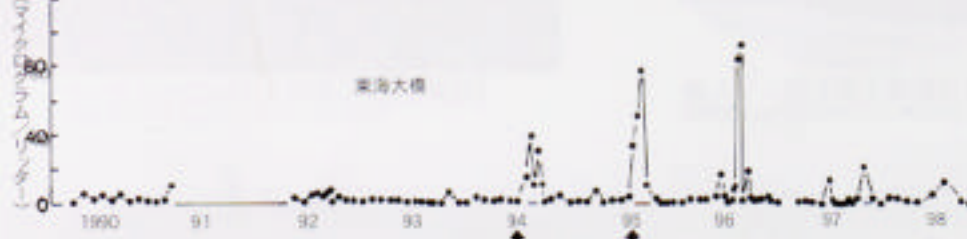
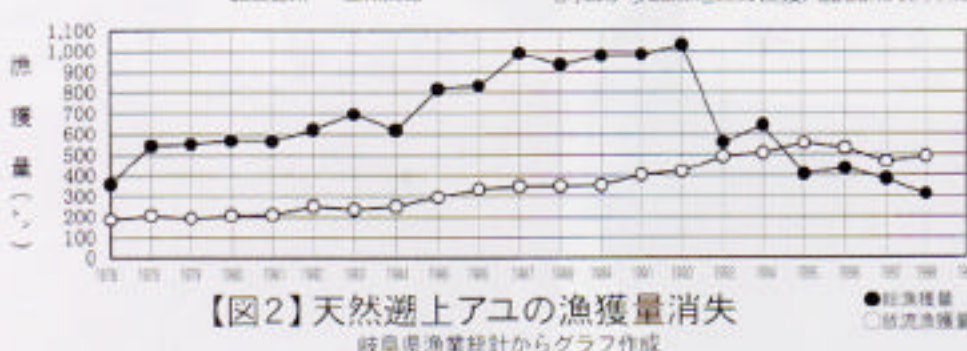
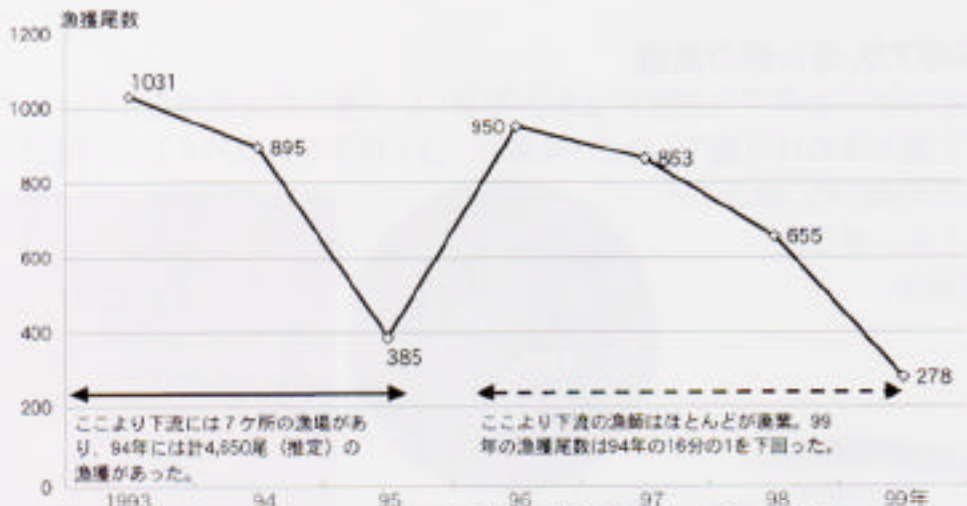
水はよどみ、藻類の大発生がくり返されています。クロロフィルa(葉緑素)の量で見ると、可動堰(河口堰)運用前は数マイクログラム/リッターであった同値が、運用後には80マイクログラム/リッターを越す激増です(図4)。藻類の中には発癌性毒素を持つ種もあり飲用には問題があります。

5. 環境ホルモンの危険も

全国の河川での環境ホルモンの検出は当たり前のこととなっております。多くの川では下流部の汚れが目立ち、女性ホルモン様物質(環境ホルモン)が測定できます(図5)。こうした水を飲用するには大きな問題があります。徳島市の水道取水口は予定される可動堰の5kmほど上流になり、基本的に可動堰の湛水域の水が飲用されることとなります。長良川河口堰の水を水道水として飲用する知多地方、北伊勢地方では、これに反対する住民運動が起こっています。

6. 治水上も危険

大出水があっても、可動堰下流のヘドロの大部分は流されず、その上に砂がたまり、水位が戻ると再び、ヘドロがたまり始め、川底がどんどん浅くなっており(図7)、治水上極めて危険です。



可動堰反対市民の会
連絡先: 〒770-0806 徳島市北前川町5丁目1-2-C
TEL 088-623-1631

監修: 長良川下流域生物相調査団
連絡先: 岐阜大学地域科学部 粕谷志郎
TEL058-293-3073 FAX058-293-3008
E-mail kasuyas@cc.gifu-u.ac.jp